

内面への道の探求者・ヘッセ

——『シッダールタ』をめぐる——

はじめに

『シッダールタ』は一九二二年にヘルマン・ヘッセ（一八七七—一九六二）四十五歳の時に書かれたものである。この作品は、紀元前五から四世紀の古代インドを舞台に、バラモンの青年シッダールタの若き日からその老齢にいたるまでの生涯を描いたものである。その生涯のなかで、人々との出会いと別れ、再会という出来事を通してシッダールタは、親子の愛、男女の愛、友人への愛、自然への愛そして真理への愛を体験する。この一連の愛の最終的な体験は、真の悟りに達し、解脱（真の自己になりきれないという苦からの解脱）に到達することであった。

第一章 作品について

シッダールタは、バラモン教の偉大な賢者、祭司になると期待されていた。彼は高名なバラモン僧たちから最高の宗教的智をさずけられ、それをかなり会得していた。そしてまた彼は父母は勿論、すべての人々から愛され、すべての人々の喜びながらも自分の心の中では少しも喜びを感じていなかった。なぜならば、誰一人として、人間の心の奥にある真実の自己（アートルマン）に到達する方

法を教えてくれなかったからである。真実の自己への道をきわめずには、礼拝、沐浴などのどんな宗教的なつとめも意味がないとシッダールタは考えていたからである。

ある時、シッダールタが住んでいる町を、禁欲修行を実践する沙門（出家僧）たちが通った。シッダールタはこの集団に期待して、友人で彼を尊敬しているゴーヴィンダとともに、その集団に加わった。

彼らはその集団で三年間、師について真実の自己への道を目標に自我（エゴ）の滅却のための修行を行なうが、解脱することは出来なかった。それ故、修行に見切りをつけようと考えていた丁度その時、祇園精舎に仏陀（釈尊）の僧団が逗留することを知った。自己のうちに於いて世界の苦悩を克服し、輪廻転生を停止させたという仏陀は、弟子たちに囲まれ教えながら国内を歩いていた。たしかに仏陀は身をもって解脱していた（悟りをひらいていた）。しかしシッダールタは仏陀から解脱について聞いても、その教え自体は他人を解脱させる力はないと考えていた。なぜなら解脱とは、それだけの人が自分の人生の中で遭遇するさまざまな苦しみを通り抜けて、はじめて到達することが出来るものではないかと、シッダールタは考えたからである。そこでシッダールタは仏陀とその教えに帰

松田幸子

依したゴーヴィンダをそこに残し、一人内面の声を聞きながら自分の道を歩んで行こうと決心した。すなわち自分は自分自身について学ぼう、自分自身の弟子になり、「シッダールタ」という自分自身の真実をよく知ろうと考えたので、遍歴の旅に出たのである。

彼はこの時からもうバラモンにも、沙門にも帰属しない一人の自由人となって、川のほとりの渡し守の小屋に一夜の宿を借りた。夜が明けると、シッダールタは渡し守に頼んで川を渡り、新しい世界に足を踏み入れた。

新しい世界でカマールという遊女と出会い、また彼女の紹介で大商人から商売を習い、大金持ちとなったシッダールタは、しばらくの間はカマールと同棲して享楽の生活を送ることになる。

しかしもともと沙門だったシッダールタは、やはりそのような生活には満足出来ず、突然、長年の放蕩生活を捨て、再びかつての川のほとりに戻ってきた。顔をゆがめて彼は水中を見つめ、川に移っている自分の顔に唾を吐きかけた。彼は自殺しようとして身を川の中に沈めようとした。その瞬間、オーム（完成の意味で祈りの始めと終わりに用いる儀礼語）という聖なる言葉がシッダールタの心の奥底から響き、彼の精神が突然目覚め、自分の行為の愚かさを悟った。すなわち自分のみじめさと迷いのうちに、自分を認識した瞬間、生命の破壊しがたいこと、忘れかけていた一切の神々しいものを再び思い出したのである。これはシッダールタにとって決定的な宗教体験であった。

それから彼は昔、自分を対岸に渡してくれた渡し守ヴァズデーヴァと再会した。ヴァズデーヴァは「川は何でも知っている。人は川から何でも学ぶことが出来る」とシッダールタに告げ、この川のほとりに留まり、川から学ぶことをすすめ、シッダールタはその言

葉に従った。静かな心で、執着を持たず、判断を持たず、自分の意見も持たずに、川から傾聴することをシッダールタは学んだ。さらに彼は川から時間は存在しないということも学んだのである。それは「川はいたる所において、源泉において、河口において、滝において、渡し場において、早瀬において、海において、山において、いたるところに同時に存在する。過去という影も、未来という影も存在しない」ということを学んだのである。

時は移り、シッダールタのかつての愛人、カマールが二人の間の子供を連れて臨終の仏陀に合おうとしていた途中で、毒蛇に咬まれ、ヴァズデーヴァの小屋に運ばれてきた。そこで二人は再会したが、カマールは死に、息子だけが残った。シッダールタは、自分の息子を側において教育しようとするが、それを負担に思う息子は彼のもとから逃げ出してしまった。諦めきれずにいるシッダールタは、息子への盲愛を川から嘲笑されたりもするが、やがて自分自身の煩惱との戦いも終わった。それを見届けた渡し守のヴァズデーヴァはシッダールタに別れを告げ、森の中へと消えていった。

ある時、年老いてまだ解脱の平和を得ていないゴーヴィンダが、賢者との風評の高い年老いた渡し守（実はシッダールタのこと）から教えを学ぼうと川のほとりにやって来た。そのようにして再会した古い友人の二人、シッダールタとゴーヴィンダは、解脱について語りあったが、その時ゴーヴィンダは、遍歴者シッダールタが真の自己に到達していることを知って、ゴーヴィンダは深々とシッダールタに頭を下げた。

以上のような『シッダールタ』の物語の中で、ヘッセはシッダールタが如何にして真の自己になり得たかを描いている。しかし彼はその解脱に一人で達したのではなく、さまざまな体験が彼を解脱さ

せ、真の自己に導いたのであった。これらの体験の描写には、多くの哲学的な考えが豊富に盛り込まれている。その中から次の三つの点について考察してみたいと思う。第一は子供への情念・ヴァズデーヴァの教育的忠告。第二は川から学ぶ・宗教的体験。第三は解脱そのものについてのヘッセの考え、の三つである。

第二章 子供への情念・ヴァズデーヴァの教育的忠告

「どんな人間の生活も自分自身への道であり、道の試み、道らしきものである。これまでどんな人間も完全に自分自身であったことはなかった」。これは『シッダールタ』が書かれた数年前、ヘッセ四十二歳の時に出版された『デミアン』の序文からの引用である。

ここにはヘッセの文学の主題ともいべき自己実現のテーマがはっきりと示されている。主人公シンクレアは、友人デミアンの導きによって自己実現へと進んでいくが、実はこのデミアンこそ、シンクレアが探し求めていた自分の姿なのであった。つまりデミアンは、シンクレアの分身であるというよりも、むしろシンクレアがデミアンの一部なのである。「自我」(エゴ)から真の「自己」へ至る過程、これが自己実現の道なのである。

そして『デミアン』の中心課題は、「私は自分の中からひとり出てこようとしたものだけを生きてみようと思んだのだった」ということである。

この同じ自己実現というテーマを、バラモンの一の宗教者シッダールタにおきかえているのが『シッダールタ』の内容である。シッダールタの自己実現は解脱と呼ばれている。それは本当の自己になりきれていないという苦からの解脱にはかならないからであ

る。主人公シッダールタの解脱の道のりには、息子への盲愛(煩惱)からの解脱がある。シッダールタの息子がヴァズデーヴァの小屋に住むようになってから、シッダールタは時間をかけて、幾月もの間、息子が自分を理解し、自分の愛を受け入れてくれ、自分の愛にこたえてくれることを待った。しかし息子は強情とむら気から無数の乱暴な悪口、雑言をはき、父シッダールタを悩ませた。そしてついある日、息子は父のもとを離れ、町へと逃げ出した。シッダールタは我が子愛しさの念にかられ、町まで探しに行ったが、遂に息子を見つけることはできなかった。このようなシッダールタ親子の一連の出来事を横で眺めていた渡し守のヴァズデーヴァは、優しくひかえめにその状況に応じて忠告した。父親に反抗しながらも息子がシッダールタのもとに留まっていた頃には、ヴァズデーヴァは次のようにシッダールタに忠告している。「……おん身の愛によって彼(息子)をしぼってはいはしないか、おん身は彼に毎日恥ずかしい思いをさせてはいはしないか、おん身の親切と忍耐によって彼を一層苦しめてはいはしないか、あの高慢で甘やかされた少年を強いてバナナで命をつなぎ、米でさえ、もうご馳走としているような、二人の老人と一緒に小屋で暮らさせてはいはしないか。老人たちの考えは静かで彼の心とは動き方がちがうのだ。彼はそういうことで強いられ、罰せられているのではないか」と。そして子供を町へ連れて行き、彼の世界である世間へ連れて行くようにとも忠告した。

息子を世の中に出せば、息子は贅沢になり、快楽と権力に溺れ、息子の父親の私のような過ちを繰り返すであろうと恐れているシッダールタに向かっては、次のように忠告した。「……おん身が息子を愛すからといって、子供のために悩みと苦痛と失望を免除してやりたいと願うからといって、そうしてやれると思うか。たとえ十

度、彼のために死んだとしても、それで彼の運命の一番小さい部分でさえ、取りのぞいてやることはできないだろう」。

人間は自分自身への道を、みずからのさまざまな体験を通してはじめて知ることができるのだとヴァズデーヴァは言いたいのである。しかし、このような忠告に素直にしたがうには、シッダールタの息子への盲愛はあまりにも大きく、子供を失うことへの不安はどうすることもできなかったのである。

シッダールタは逃げた息子を連れ帰すために川を渡り町に出かけたが息子を見つけることができずむなしく帰ってきた。それでもまだ諦め切れず、再び川を渡った時、川に映った自分の顔が、昔の父の悲しそうな顔に似ているように思えた。その時、彼は、バラモン僧としての信仰も学識も深かった父が、自分（シッダールタ）の家出（真の自分自身への道を見つけようとしての）を止めることができなかつたことを思いだした。このような宿命的な輪廻の中を駆けめぐっている自分の愚かさをシッダールタは知り、それを川から嘲笑されている自分を自覚したのである。

第三章 川から学ぶ・・・宗教的体験

シッダールタが、彼の息子への情念から行なったこれまでの数々の愚かな行為を、そのことを川から笑われたと意識したことなどを渡し守のヴァズデーヴァにゆっくりと語ると、ヴァズデーヴァは、さらに彼にたいして耳をすませて川からもっと聞くことを勧めた。その勧めに従ったシッダールタは、次のことを川の流れの中に読み取った。

シッダールタの「父の姿、息子の姿が流れ合った。カマラーの姿も現れて溶けた。ゴーヴィンダの姿やほかのさまざまな姿も現れ、

溶け合い、みんな川になった。みんな川として目標に向かって進んだ。慕いこがれつつ、願い求めつつ悩みつつ・・・川は彼や彼の肉親や、彼が会ったことのあるすべての人からなりたっていた」。

シッダールタは、川がたえず流れながら常にそこにあり、常に何時も同じでありながら、どの瞬間にも新しい姿をしているのを眺めることで、川から過去、現在、未来という時間意識を超越することを学んだのである。彼は深く瞑想することで時間というものを超越すれば、一切の過去に存在した生命、現在に存在する生命、未来に存在するであろう生命を、同時に見ることに出来るということを発見した。さらに川の声を聞くことに没頭しきつたシッダールタには、次のような声も聞こえてきたのである。

これまで会ったすべての人の「喜びの声と悩みの声、良い声と悪い声、笑う声と悲しむ声、百の声、千の声がひびいた・・・これまでに、たびたびそのすべてを、川の中のこれらの多くの声を聞いたが・・・もう彼は、多くの声を区別することはできなかった・・・すべてが一つであった。すべてがからみ合い、結びつき、何千回となくもつれ会った・・・すべてがいっしょになったのが世界だった。すべてがいっしょになったのが現象の流れ、生命の音楽であった・・・この川に、千の声のこの歌に注意深く耳を澄ますと・・・魂を何らか一つの声に結びつけず、自我をその中に投入することなく、すべてを、全体を、統一を聞くと、千の声の大きな歌はただ一つの言葉、すなわちオーム、完成から成り立っていた」。

シッダールタは魂を開き、心しずかに川から響いてくる声に聞きいつているうちに、それぞれの声にこだわらずに聞くことができるようになり、この全部の声が大きく統一されたものとして聞けるようになったのである。その時から、彼は運命と戦うことを止め、悩

むことを止め、生命の流れと一致している自分を自覚し、自分が宇宙全体の統一に結びついていることを悟った。

このような統一という高い次元にまで意識が到達し、その上に立ってかんがえる時、人間は真の自己に到達し得るとヘッセは考えていることがわかる。

この高い次元の統一の思想については、ヘッセが五十歳の時に出版した『荒野のおおかみ』の中でも扱われている。そこでは人間の心の中の精神的（理性的）な部分と感性的な部分の統一となっている。

『荒野のおおかみ』の物語はこうである。自分の魂が、本能的な欲望に身をまかせようとするおおかみと、精神的世界に生きようとする人間とに分裂しているという思いにとりつかれた主人公のハリー・ハラーは、自殺をしようと思いつめてしまう。その時、ハリー・ハラーは、彼の分身とも思われるように彼のことをよく理解している美少女に導かれて仮面舞踏会に参加し、その後彼女の友人に魔術劇場に招待された。

そこはハリー・ハラーが憧れていた時間のない、永遠の真の世界、そして現実より次元の高い世界へと入るために通過しなければならぬ劇場であった。その劇場で彼は自分の無意識の奥底にある地獄のような欲望の世界を見せられた。そして彼は魔術劇場に在ることを忘れ、悲壮になって取り乱してしまった。そのことを永遠の真の国の住人から嘲笑されてしまった。この体験を通して、ハリー・ハラーは永遠の真の世界に入るには、この世の現実をあまり真剣に受けとめないユーモアが必要であることを学んだ。真剣にとらえるに値しないものは、ユーモアで笑いとばすだけの魂の広さを持つことが必要であるということ学んだのである。そのように生きる

には、人間は精神的なもののみを尊重し、感性的なものを軽蔑しながら生きることを止め、両者（おおかみの部分と人間の部分）を統一した豊かな人間性を持って生きることが大切であるとヘッセは述べている。

『シッダールタ』の中で川が彼を嘲笑するのは、彼の息子への盲目的な愛であり、『荒野のおおかみ』ではハリー・ハラーがあらゆることを真剣にとらえすぎたことが、永遠の真の世界の住人から嘲笑される原因になったのである。この嘲笑されている二つの対象は、人間が真の自分を生きるためには障害物となるものであるとヘッセは言う。

第四章 解脱について

『シッダールタ』の中で、ゴーヴィンダとシッダールタの二人の年老いた友人が解脱について語る場面がある。

ゴーヴィンダは沙門として生涯戒律に従って暮らし、周囲の僧たちからもあがめられていたが、自分自身の心の中ではまだ悟りを見いだしてはいなかった。その彼が、賢者と評判の高い渡し守になつていたシッダールタの所にやって来て質問した。

ゴーヴィンダ・「おん身は教えを持っておられるか、おん身の信仰、あるいは、おん身がそれに従う知恵、おん身が生きていき、正しく行なう助けとなる知恵を持っておられるか」。

シッダールタ・「知恵は伝えることができない、というのが私の発見した思想の一つだ。……知識を伝えることは出来るが知恵は伝えることが出来ない。知恵を見いだすことは出来る。知恵を生きるこ

とは出来る。・・・知恵を語り教えることは出来ない。」

これはヘッセが作品の中で問題にしている重要なものの一つであり、解脱するための知恵を教えることは出来ないということである。これこそシッダールタが青年の頃から感じていたことであり、師につかず自分のうちなる声に従って遍歴を続けてきた理由である。

ここで解脱するための知恵を教えることはできないとシッダールタが語るのには、言葉や思想で表現されるものは物事の半面だけであるからである。それは仏陀が世界について説教をする場合、輪廻と涅槃、迷いとまこと、悩みと解脱とに分けているが、世界そのものはそれほど単純に、これは輪廻とか、これは涅槃であるとかいうことは出来ない。そのように分離して見えるのは、そこに時間意識があるからである。たとえば「あらゆる幼な子はいつかは老人になるであろう」と言う場合、この「いつか」という時間意識を取りのぞいて考えれば「あらゆる幼な子はすでに老人をみずからの中に持っている」と言うことが出来る。同様に考えれば、輪廻の中にすでに涅槃があり、悩みのなかにすでに解脱があると言える。

人間がそのように考えられるかどうかは、そのような現在をそのままの姿で愛し、畏敬の念を持って眺められるかどうかで決まるとシッダールタは考えるのである。その考えにたいして「それはわかる」が、しかしとゴーヴィンダは反論を試みるのである。

ゴーヴィンダ・・・「・・・釈尊は（万物にたいして）好意といったわりと同情と寛容とを命じるが、愛を命じはしない。彼はわれわれに、心を愛によって地上のものとなぐことを禁じた」。

シッダールタ・・・「・・・人間を助け、教えることにささげたゴー

ターマ（釈尊）が、どうして愛を知らないことがあるのか。・・・あの人、おん身の偉大な師の場合でも、・・・彼の行為と生活は彼の説教より重要だ。彼の手ぶりは意見より重要だ。説教や思索にではなく、行為や生活の中にだけ、私は彼の偉大さを見る」。

青年の頃シッダールタは、悟りをひらいた仏陀が多くの人に正しく生き、悪をさけることを教えるのを聞き、その教えはたいそうすぐれていることを認めた。しかしその教えの中には、彼が悟りを開いた時に心のなかで起こったことが一つだけ抜けていることにシッダールタは気がついた。そして彼は、解脱というものは他者から教えられるものではなく、一人ひとりの人間が、自己の人生において体験的に獲得しなければならないということを知ったのである。ヘッセによれば、人間が解脱するということは、川や一本の木や一つの石やありとあらゆるものの中に宿る神性を感じとり、畏敬の念を持って愛し、自分自身もそのおなじ根源から生かされて生きていると思うときに、解脱がはじめて可能になる。

『シッダールタ』では、主人公が時間を超越していく過程や、世界を統一的であると認めること、それと自分も一致していると思う神秘的な体験などについて書かれている。またあらゆる生きているものの中にある神性についても述べられているが、これらのことについてヘッセは、彼が『シッダールタ』を発表する二年前に出版した『さすらい』の中でも述べている。その作品に収められている「木々」と題するエッセイのなかに次のような表現がある。

「木は神聖なものだ。木と語り、木に傾聴できるものは、真理を

悟る。木は教訓や処世を説かない。各論にはこだわらず、生の根本原則を説く。ある木は言う「私の力は信頼だ。私は自分の父たちのことを何も知らない。私は毎年、自分から生まれる何千という子供たちのことを何も知らない。私は自分の種子の秘密を最後まで生きる。それ以外に私が気づかうことは何もない。私は自分の中に神がいると信じている。この信頼の念で私は生きている」。

人間の何倍も長生きする木、そして一ヶ所に動かず黙って孤独に耐えている木が語るのを聞き取ることが出来る人間は、ひとつひとつの現象に一喜一憂することなく、木と同じように自分の中にある神性な生命の呼び声にしたがって生きることが出来るとヘッセは言うのである。ここでも『シッダールタ』のなかで語られているような解脱の意味を読みとることが出来る。

おわりに

シッダールタが川から学んだ統一の思想から解脱にいたるまでのヘッセの考えの背後に、私たちは、次のことを読みとることが出来る。それは、人間というものは大いなる自然によって生まれた他のあらゆる被造物と同じであるということである。それ故、人間も他の被造物と同様に与えられた生命力を信じて、黙々と自力で生きていく外はないのに、生きていくことは容易ではないとか、生きていくのは難しいなどと、子供じみた悩みをあれこれと言いつつ訳をしながら生きている。第四章で述べたように、木が、芽を出す以前から自分の種子の中に含まれていた可能性を信じて生きているように、人間ももっと謙虚になって自分の内なる神性な声に耳を傾け、真の自己実現に向かって生きていくべきではないかと、ヘッセは作品を通して私たちに語りかけていると考えられる。その時ヘッセによれ

ば、神性な声の呼びかけには真剣に答え、その他のことには笑ってすませることの出来るユーモアを持つ魂の広さも大切なことである。

参考文献

Hermann Hesse, Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Fünfter Band. Siddhartha.

『シッダールタ』ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳、新潮文庫

『デミアン』ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳、新潮文庫

『さすらい』ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳、新潮文庫

『荒野のおおかみ』ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳、新潮文庫

『内面への道の探求者・ヘッセ——荒野のおおかみをめぐって

——』松田幸子、上田女子短期大学紀要第二十三号、平成十

二年三月